
9 . 南アメリカから

フランシス・ローレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

9・南アメリカから

【Nコード】

N3259T

【作者名】

フランス・ローレライ

【あらすじ】

イサムは、国際会議の主催地に名乗りをあげた故郷、札幌を応援するために、南米チリの首都、サンティアゴに出張する。

8月初めの、暑い日だった。

「ガラーン、カラーン……グワラーン、カラーン！ ガラーン、カラーン……グワラーン、カラーン！」

シユテファン寺院の鐘が鳴りやむや否や、

「ルルルル！」と、イサムの机の電話が鳴った。もう一度鳴る。隣の平原さんが、何故早く取らないのか、との視線で彼を見た。

ここはケルントナー通り沿いの、寺院すぐ近くの「PIKACHU」のオフィス。

イサムがパソコンから顔を上げて電話を見ると、点滅するランプは案の定、内線だった。

「はい。お待たせしました」

「国谷君、ちよつと面白い話があるんだけど……」

本間支店長の声だった。日本人男性が5人と少ないので、すぐ分かるのだ。

「は、何でしょうか？」

「君は南米に行ったことあるか、南米？」

「いいえ」

「実は、出張の話が舞い込んでいてね」

「はい」

「2週間先だけど、お願いできるかな」と、支店長がやや語調を強める。

「勿論、行きます」

イサムは、近々ママがアウガルテン管弦楽団に就職するので抵抗感もあつたが、現地雇いの弱みで調子を合わせたのだ。

「チリのサンティアゴだから、結構良いはずだよ」と、支店長が続ける。

「チリですか」

「うん。国谷君は、札幌の出身だったよな？ この前パリで話が出たんだが、我々は、世界ワイン・オリーブ協会の来年2002年総会の開催都市として、札幌を推したいんだ。その誘致合戦がサンテリアゴで行われる。対立候補は、ハンブルグとケープタウン」と、支店長が熱っぽく語る。

「何日間の会議ですか？」と、イサムが尋ねた。

「多分、一週間。帰りがけにニューヨークで、ここのワインの宣伝もしてきて欲しいんだ。ほら、マンハッタンに超有名な日本料理屋さんがあるだろう？」

「ノブナガですか？」

「そうだ。白ワインを配送しておくから、帰りに立ち寄って、試飲会で宣伝してくれないか？」

「分かりました」

イサムは、意外と面白そうな出張、との印象を得たのだ。

そう言えば昔、本間支店長のパリ出張のおかげで、マミとの週末デートに邪魔が入ったけど、パリでこんな話が出たのか……。

世界ワイン・オリーブ協会はもともフランス、イタリア、スペインと言った地中海沿岸の国が中心だったが、ワインやオリーブが世界中で嗜好されるにつれ、メンバー国も大幅に増えていった。そして日本も程なくメンバーに加わったのだ。

協会の本部は南仏のエクス・アン・プロヴァンス。

今年のチリ総会でうまく札幌に決まれば、来年、アジア地域で初の年次総会になるのだ。

イサムは、ワインに詳しい、若手の札幌出身者なので、白羽の矢が立てられたに違いない。

彼は早速、マミに電話を入れてみた。

「出張が入ったよ。南米だ！」

「へえ……南半球さえ、行ったことないわ。どこ？」

「チリの首都、サンティアゴだよ」

「へえ……チリって？」

「南米大陸の南西にある、細長い、唐辛子形の国で……」

「いつから？」

「多分、8月18日頃から。帰りに、ニューヨークにも立ち寄りらしい」と、ためらいがちに彼が答える。

「いつ、戻るの？」

「9月に入るかも知れないね」

「何だ、せっかく、引越し手伝ってもらおうと思ったのに……」
と、彼女が苦情を訴える。

「そうか……悪かったね……」

「しょうがないわよ。行つてらっしゃい、待ってるから」と、マミが彼を激励する。

その晩、イサムは、萩谷オサムにも電話を入れた。

「札幌のために、勝つてこいよ！」と、萩谷は激励してくれた。彼は、イサムとその昔、札幌の稲穂小学校で一緒だったのだ。

「でも気を付けろ、南半球では、調子狂うかも知れないから……季節も、逆転するし」と、付け加える萩谷だった。

それにしても、南米は遠かった。マドリッド経由で、何と18時間以上のフライトである。

長く退屈な航程を経て、アルゼンチンの首都、ブエノス・アイレスに到着。その空港で45分も休憩すると、今度は、アンデス山脈越えのフライトとなった。

山脈が近づくにつれて高度がどんどん上がり、ついに森林はおろか植生も失われ、ごつごつした肌合いの岩山が裸で迫ってくる。そこから更に、ぐんぐんと登りつめる。この辺は、標高7000メートルに迫るのだ。

漸くてっぺんまで来ると、今度は、山頂すれすれのコース。良好な視界の下で、凹凸に満ちた灰色の岩肌が翼のすぐ下に見え、そこ

に黒い機影が映っているのだ。生きた心地がしない。

アンデス山脈を越えると、突然、下に何も見えない絶壁状態となった。

イサムは機体ごと宙に浮いてしまい、まるでハンググライダーで飛びたつたような気がした。下は、奈落の底！

劇的な山越えを終えてしばらくすると、遠くに何と、入り江らしきものが見えた。

太平洋！

その後、少し内陸方向に戻り、チリの首都サンティアゴに着陸した。

飛行機の外に出ると空気がとても清々しい。万年雪をいただいたアンデス山脈が遠くに見える。

昨日まで夏の終わりだったのに、南半球のここは、確かに春めいている。人々の表情も明るい。

空港でイサムは、世界ワイン・オリーブ協会のブースを見つけ、受付けの手続きに入った。そして会議参加者のバッジと、ワイン・ボトルとオリーブの小枝をプリントした、黄色いTシャツをもらった。会議関係者や各国の仲間が、これを着て歩いているようだ。

ホテルに向かうシャトル・バスに乗りこむと、窓から見える柳の新緑が、寝不足の目にしみた。

サンティアゴは広々として開放感があり、ヨーロッパにいるような落ち着きの感じられる都だった。

イサムはホテルにチェックインすると、日本の代表団用の大会議室に下りていった。

若いチリ人らしき女性が電話に向かっていた。

「Si, si, el japonés está serio, entonces……」（そうそう、その日本人、結構真面目で）ホテルの関係者が、代表団の要望について相談しているらしい。

「Mirra, estoy ocupada, esta noch

e……」（ねえ、私、今夜は忙しいの）

「何だ、私用電話になってきている」と誰かが声をあげる。声の主はチョビ髭の中年男性。

よく見ると、札幌の拓陽高校時代の先輩、盛田さんではないか！

「あ、盛田さん！ お久しぶりです」と思わず声をかける。

「なんだ、国谷君か…… お久しぶり！」と彼はイサムを肩をたたき、握手を求める。

「スペイン語、分かるんですか？」

「多少ね、商売柄……」と、盛田さんが答えた。

盛田さんは、イサムの勤めている商社「PIKACHU」の東京本社から来ていた。イサムが、ウィーン支店で働くようになった背景には、彼の推薦があったのだ。

「それにしても久しぶりだね。それ、君のパソコン？」と言う盛田さんの指は、イサムの抱えている黒い布地風のケースを指していた。「ええ、ウィーンから手荷物で……それにしても長いフライトでしたね」とイサムが答える。

「御苦労様。東京からも長かったよ……」

「随分立派なヒゲですね」と言つてイサムが少し表情を崩し、にっこりした。

「そう。おい、札幌のために頑張ろうな！」と先輩が答える。

そこでイサムは、今回の出張が実は、盛田さんの手引きかと感じたのである。

「国谷君、蜂須賀支店長に挨拶した？」と盛田さんが聞いてくる。

「いいえ……」

「ほら、あそのソファに……彼は、旭川出身でワイン業界のボスだったんだよね……」と言いながら、盛田さんが、部屋の反対側を示した。

PIKACHUのサンティアゴ支店長は背が高く、スリムでちょっと粹な感じの紳士だった。

「国谷です。今、ウィーンから到着しました」

「やあ、蜂須賀です。御苦労様、遠いところ」と、よく響く深い声で彼が答える。

「今回参加できて、光栄です。宜しくお願いします」と言いながら、イサムが名刺を渡した。

「このキャンペーン、頑張つて欲しい。ついでに少しサンティアゴも見ていつてくれ、な……南十字星も見えるぞ」と言いながら、支店長が名刺をしげしげと見つめる。

「はい」

「よろしく」と言つて、支店長は内ポケットから名刺を取り出し、イサムに渡した。

翌日の月曜日は、総会初日だった。

朝とても早く、盛田先輩から電話があり、「国谷、朝食と一緒に食べないか」と誘われたので、彼はあわてて例の黄色いＴシャツとジーンパンに着替えた。

先輩の部屋は意外と広く、事実上小さなスイート・ルームになっていた。

「おはようございます」

「お久しぶり、ご苦労様」

先輩も、同じ黄色いＴシャツ姿だった。二人ともずんぐりむつくり系だったが、札幌の拓陽高校時代、空手部員同士だったのだ。

「その髭、なかなか貫禄ですね」

「いや、上海時代からだね……」

二人でルーム・サービスの朝食をとりながら、話し込む。卵やらオレンジやらで、とても豪華である。

「先輩は、大学でも空手を？」と言いながら、イサムがオレンジ・ジュースを二人のグラスに注ぐ。

「そう。君は確か、高校でやめたよね？」と盛田さんが顔を上げて昔の話を持ち出す。

「ええ、残念ながら、大事なところにケリが入っちゃって……その

後はオケに戻ったんです」

「しょうがないよな、清水さんも手元、いや足元が狂っちゃって……それにしても、格闘技やったあとでオケね……でも、その縁でウィーンにいるんだよな……」

「はい。その節は、お世話になりました……」と、イサムがへりくだる。

「どう、本間さんの所？」

「落ち着いていて、居心地良いですよ」

「……ところで、結婚した？」と、先輩が肝心なところをついてきた。

「いや、未だに独身で」

「じゃあ、一応、俺と同じだ。ワツハツハツ！ 別に、あのケリが原因で結婚できない訳でも、ないんだろう？」

「いいえ、まさか、そんな……」と、イサムが困ったような表情で答える。

「ウィーンは、どう？」

「一番印象的なのは、舞踏会ですかね」と、イサムが答える。

「要するに、ワルツとか？」

「なかなか華麗で……昔、風紀上の問題があったのが、良く分かります。結構、男女密着型で……でも、自分は伴奏ばかりで……」と、イサムが続ける。

「密着するために、皆、踊るんだろう？」

「そう……下半身の微妙な部分が、時々くつつくんです」

「ランバダみたい？　ところで東京時代の彼女、どうしてる？　寂しがってやしない？」と、盛田さんがコーヒーを注ぎながら、問うてくる。

「いやあ、自分がウィーンに逃げたものですから、何となくその後……」

「藤江さんだったよね？　確か、今、ニューヨークにいるはずだよ」と、盛田さんが核心に迫る。

「ああ、そうでしたか」と言いながら、イサムは彼女のことを思い出そうとする。

彼は東京の大学に進学すると、フルート奏者としてオケに入団したが、3年の時、横浜の大学から藤江良子が入団。イサムはフルートのセカンド、彼女は第二ヴァイオリンだった。

「彼女は確か、日系の大手銀行にいるはずだよ」

「……へえ……」とつぶやきながら、イサムがいぶかしげな顔をする。

「君は帰りに立ち寄るんだよね、ニューヨーク。連絡とつてみたら？」

「ええ、そうでしょうけど……」と言いながら、イサムは警戒心を働かせはじめた。

「彼女のメルアド、持ってる？」

「いいえ」

「彼女の勤め先から多分、割り出せるよ。創業銀行関係者のメルアドがあるから、名前の部分を入れ替えて……あとでな」と、盛田さんが続けた。

「そうですか……なら、宜しく」

10時頃、彼らは蜂須賀支店長と一緒に、隣のホテルにいた世界ワイン・オリーブ協会のチャンドラ会長を訪問した。

そこで支店長が、熱っぽく誘致キャンペーンを展開。

「日本ではワインは勿論のこと、オリーブも栽培しています。特に日本女性が、地中海の料理やお酒を好むのです。2002年の総会は、是非とも札幌に主催させて下さい。アジアで開催されれば、宣伝効果は、絶大。ワインやオリーブも、ファッションとして流行し、飛躍的に売れるに違いないのです」

ところが会長の反応は、極めて事務的だった。

「皆さん、一生懸命なのは分かりますが、他にも候補地がありますよねえ……例えばケープタウンが勝てば、アフリカで初の開催。だ

から他の候補地の関係者とも、よく相談して下さい。これから結構、大変ですよ。幸運を祈ります。では、そろそろ、会議場に」と言つて、彼は忙しそうに、皆を追ひ払つたのだ。

その晩、団員は支店長の案内で、土地で評判の海鮮レストランに出かけた。そこで生牡蠣、スモークサーモン、蟹や生ウニを肴に、土地のワインを賞味したのだ。

みんな、久しぶりの解放感に浸つて喜んだ。

イサムがそこで一つ学んだことには、チリの国土は唐辛子形でも、国名まで唐辛子に由来している訳では、ないらしい。

やおら蜂須賀支店長が立ちあがつて、スピーチを始める。

「投票になったら、札幌が勝つでしょう。みんな、対立候補が撤退するくらい、強力なキャンペーンを張ろうな！ ケープタウンは南半球だから、ここサンティアゴの翌年だと、勝ち目はないはずだ。問題はハンブルグだが、つい最近、ヨーロッパで開催したし……アジアで初めて、とアピールすれば、勝利、間違いなし！

グリーン・ベレーの座右の銘は、Who dares , wins ! 敢えて挑む者が、勝つのです。

私の座右の銘は、Who thinks , wins ! 良く考える者が、勝つんです！

それでは、札幌のために、乾杯！」

「乾杯、乾杯！」と、みんなが地元の赤ワインの杯を上げ、唱和する。

ところが、支店長が退出した途端に、懐疑的な声が漏れ始めた。

「Who drinks , wins .」の間違いじゃないのか？」

「ワッハッハッ！」

「彼は、立場があるから……」

「ヨーロッパは、確かに去年ルクセンブルグが主催したけど、来年アフリカで開催しても、初めてだ」

「すると、札幌のメリットって、何だろう？」

「涼しいことでしょうか……」

「ちよっと、苦しいかも知れない。南アのワイン、知名度高いし……」

「札幌じゃあ、オリーブ作らないしな！」

気がついてみると、夜中の12時近くになっていた。

みんな、タクシーに分乗してホテルを目指す。盛田さんはタクシーの中で、イサムに小さな紙切れを渡した。

「ryoko.fujie@sohgyo.com」と書いてある。

「今朝の宿題だよ。多分、これで彼女と連絡がとれるはずだから……」と盛田さんが低い声で言う。

「どうも、わざわざ」と答えるイサムは、当惑気味。

先輩は、拓陽高校OBの中でも、面倒見が良すぎるとの評判だった。

イサムは、ホテルの部屋に戻ると、酔った勢いでニューヨーク宛てにメールを作成した。

「藤江良子ちゃんへ。元気になっている？ 国谷イサムです。NYに移ったとは知らなかったけど、すごいね。ぼくはあの後、ウィーンに移ったけど、今ちよっと南米のチリに出張中です。ちよっとした誘致合戦があつて、もう、大変。帰りがけにNYに立ち寄るけれど、久しぶりに会いませんか……」

そして彼は、「送信」をクリックした。

ついに金曜日が来てしまった。

朝一番に、決戦投票が予定されていた。

イサムが札幌関係者と共に国際会議場に入ると、壇上には既に、投票箱が置いてあった。

議長の簡単な挨拶に続き、いよいよ投票が始まった。

ハンブルグが形勢不利と見たためか、脱落したので、札幌とケープタウンの一騎打ちとなった。

みな行儀良く、国名のアルファベット順に壇上に上がり、票を投じる。

日本の番が来ると、蜂須賀支店長が代表で壇上に上がり、丁寧に票を投じた。

投票が終わると、みな固唾を呑むうちに、集計作業。

そしてついに、議長席から結果がアナウンスされた。

「勝ったのは、ケープタウン！」

何と、13票差だった。

「おかしい！ 南半球続けて二回は、絶対おかしい……」と、蜂須賀支店長は肩を落とし、愕然としていた。

ひな壇ではケープタウンの関係者が、チャンドラ会長をはじめ世界ワイン・オリーブ協会幹部と、熱のこもった握手。

たくさんのカメラマンがフラッシュを焚くので、とてもまぶしい。ケープタウンでは「世界ワイン・オリーブ協会の年次総会、初めてアフリカに」との見出しで朝刊に載るのだろう。

南アフリカの連中はみな肩をたたきあい、喜びに浸っている。

「13票か……札幌を応援してくれた皆さんに申し訳ない」と蜂須賀さんがうつむきがちに言った。

「しょうがないよ。あそこのワイン、知名度高いし……」と、誰かが言った。

「今年は本当に御苦労様。来年はケープタウンで会いましょう」と議長が最後にアナウンスして締めくくった。

イサムは周りの連中をよそに、早めに部屋に戻り、ジャケットとTシャツをかなぐり捨て、上半身裸でインターネットにアクセス。

驚いたことに、藤江良子から、着信！

「信じられない！」と、口走る。

「国谷君、お元気そうですね。メールをいただくなんて、もう、び

つくり。ニューヨークに来られるのなら是非お会いしたいわ。ホテルに着いたら家に電話を下さい。藤江良子」

よく見ると末尾に、彼女の電話番号が書いてあった。

そして彼は、舞い上がってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3259t/>

9．南アメリカから

2011年8月14日03時33分発行